

K-617

山形県長井市埋蔵文化財調査報告書第5集

分布調査報告書

1989年

長井市教育委員会

分布調査報告書

1989年

長井市教育委員会

序

近年、伊佐沢地区におきましても、道路整備や用地開発、土砂採取などの事業が進み、それらは遺跡が多く散在し、良質の土壤が存する山麓部にまでも及ぶようになりました。

この時に当たり、昭和63年度に計画、実施いたしました「伊佐沢地区遺跡詳細分布調査」をまとめて報告できることは誠に意義の深いものがあると思います。

申すまでもなく、豊かなまちづくり、ふるさと創生は、新奇なものを追い求めるこよによってのみ期待されるものではありません。

平和で緑豊かな当地区の山麓には、绳文時代、奈良・平安時代等の文化を留める貴重な財が埋蔵されていることが明らかになりました。数箇所に見られる館跡と共に、私達の魂を遠い昔に呼び込んでくれます。

本事業を通して発見されました数々の貴重な資料により、特に地区的皆さんのふるさとに関する理解が一層深められ、愛郷の心情と共に活力あるまちづくりへの意識高揚にもつながりつつあるのではないかと察しております。

調査された箇所は25にも及び、この地区における先人の幅広い生活と奥床しきを伺い知ることのできる埋蔵文化財も数多く発掘されました。

全期間にわたって困難な調査に当たって下さった佐藤正四郎先生をはじめ、ご協力戴きました数多くの方々に心から感謝申し上げます。

調査面積25km余にわたる今回の調査は地元伊佐沢郷土史会の皆さんのご好意によるお手伝いも戴きましたが、当長井市には文化財保護協会の発足への準備など、地域における篤志研究家の方々のリードによって、日頃の研修の成果を結集され、ふるさとづくり・まちづくりへの積極的な社会参加への気運も高まってきているのは本当に有難いことあります。

豊かな生涯学習の時代に入り、遺跡調査や文化財保護へのひたむきな取り組みも全国各地にみられるようになり、その成果の報告書等も色々と出されておりますが、こうした貴重な資料と共に本報告書も、関係機関や研究者の間で交流されるだけでなく、多くの一般市民にも理解されて「いにしえ」との関わりの中で現在の生活を考えて戴ける一助となることを祈念いたします。

平成元年3月

長井市教育委員会

教育長 鈴木泰助

例 言

- 1 本書は、長井市教育委員会が国庫補助を得て、昭和63年度に実施した伊佐沢地区を中心とした開発事業等にかかる遺跡詳細分布調査の報告書である。
- 2 調査期間は昭和63年9月20日から平成元年3月31日までである。
- 3 調査体制は次のとおりである。

調査主任 佐藤正四郎（長井市埋蔵文化財専門委員・県立米沢女子短大講師）

調査員 岩崎義信（長井市教育委員会主事）

調査参加者 會田芳雄、安部博之、飯沢太一、伊藤 豊、井測利平、遠藤信夫、尾形英次、尾形幸作、金田芳樹、志釜 肇、渋谷 功、渋谷虎五郎、東海枝久藏、鈴木久一郎、鈴木敏男、高橋辰巳、竹田孫藏、竹田利一、田畠辰雄、土屋与五郎、手塚 勇、那須末吉、布施孫次、本田春弥、松木竹雄、山口久吾

事務局長 斎藤 隆（長井市教育委員会 教育主幹）

事務局長補佐 平美智子（長井市教育委員会 主幹補佐）

事務局員 岩崎義信（長井市教育委員会 主 事）

- 4 本調査にあたっては、次の方々にご指導・ご協力をいただいた。ここに記して感謝申し上げます。

山形県教育庁文化課、伊佐沢郷土史会、中央地区公民館、伊佐沢地区公民館、長井市産業課

- 5 掃図・付図の縮尺についてはスケールで示した。

- 6 遺跡番号は各地区的頭文字を付して、中央地区は「C H」、伊佐沢地区は「I」の○番とした。

本書の編集・執筆は佐藤正四郎・岩崎義信が担当した。掃図・図版等の作成は安部博之、板垣賢二、東海枝智子、竹田タヨ子の補助を得た。

目 次

I 調査の経緯	1
1 調査に至るまで	1
2 調査の方法	1
3 調査の経過	2
II 伊佐沢地区遺跡の概要	3
III 調査の概要	5
IV 遺跡の位置と現況	13
V 城館遺跡について	21
VI 遺物について	25
VII 勘進代地区土地改良事業に伴う分布調査	30
1 調査に至るまで	30
2 調査の方法	30
3 調査の経過	30
VIII ま と め	32

挿図目次

第1図 分布調査貴跡位置図	4
第2図 遺跡位置図	13
第3図 遺跡位置図	15
第4図 遺跡位置図	17
第5図 遺跡位置図	19
第6図 桐町の鉢繩張図	23・24
第7図 勘定代地区分布調査概要図	30
第8図 分布調査土層柱状図	31

図版目次

図版1 遺跡現況	14
図版2 遺跡現況	16
図版3 遺跡現況	18
図版4 遺跡現況	20
図版5 分布調査遺物	26
図版6 分布調査遺物	27
図版7 分布調査遺物	28
図版8 分布調査遺物	29
図版9 遺跡現況	31

I 調査の経緯

1 調査に至るまで

当伊佐沢地区は、三方を丘陵に囲まれ南側が開けた馬蹄形を呈する小盆地で、中央部を逆川が流れ、地区内にはいたるところに河岸段丘や丘陵が形成され、遺跡の立地に適した条件を備えている。これまでに、昭和53年に山形県教育委員会が実施した分布調査で6箇所の遺跡が確認されているが、それ以降も遺跡に関する情報が寄せられ、近年その数を増している。

しかし、近年時代の要求によって多くの開発事業が計画されている。

農道関係では、芦沢地区において、団体営農道が計画されており、また下伊佐沢地区には農免農道が計画され、将来的には南陽市側からの農道と合流する予定である。これらの農道は全長が1キロメートル未満のものであるが、計画路線は河岸段丘上や、小陵丘を横断するルートになっている。

農用地開発事業については、すでに中伊佐沢地区においてホップ圃地が、下伊佐沢地区では、たばこ圃地がそれぞれ造成されている。これから開発が予定されているところでは、下伊佐沢地区で12ヘクタールの農地開発と、上伊佐沢地区の大野平で70アールがそれぞれ、昭和64年度以降に計画されている。

土採りについては、当地域は周囲を山に囲まれているものの、出羽丘陵の南端にあたるため険しい山は少ない。それに加えて周辺一帯の山土は土木工事用客土の条件を備えていることもあり、関連業者による採掘の現状が著しく、事前調査を行なった時点で9箇所の土採場が確認されている。現状を見ると平地はもとより標高350メートルの山の頂きまで赤土の地はだを見せているところもある。

これらに対処するために、市教育委員会は市産業課をはじめ関係機関との協議を経て、伊佐沢地区と中央地区の一部を対象に昭和62年度から遺跡詳細分布調査を実施してきた。本調査も予想される開発事業にさきがけて、遺跡の保存と活用に役立てるために、国庫補助を得て昭和63年9月20日から調査を実施した。

2 調査の方法

(1) 聞き取り調査

現地調査を実施するにあたり郷土史会や地区公民館を通じて、昔からの言い伝えや畠の耕作・土木工事等における遺物の出土について聞き取りを行なった。また土器や石器の収集者からは、出土地点や収集年月日についても情報の提供を受けた。

(2) 現地踏査

今年度の調査は伊佐沢地区中央部を流れる逆川を境にして、西側を中心に現地踏査を実施した。聞き取り調査で入手した情報や、行く先々での遺物の散布・出土についての情報を収集しながら、新規遺跡の発見につとめた。特に現地踏査では遺跡の立地条件をそなえたところでは入念な調査を行なった。また、周知の遺跡については現地の状況や範囲の確認に重点をおいた。

(3) 繩張図の作成

当地域には古くから中世城館址に関する資料や言い伝えが多く残っている。平地の館跡はもとより山頂部に位置する山城に至るまでくまなく伝わっている。これらのなかで測量が可能な箇所を選んで繩張図の作成にあたった。

3 調査の経過

遺跡詳細分布調査は、長井市教育委員会が主体となり、長井市産業課、伊佐沢地区公民館、伊佐沢郷土史会の協力を得て実施した。

経過については調査の方法でも述べたが、聞き取り調査、現地踏査、繩張図作成と大きく3種類に分けて実施し、現地踏査の行程はつぎのとおりである。

10月24日 下伊佐沢地区 竹の俣、中屋敷で遺物を採集する。通称「館ノ内」とよばれる横沢氏宅で堀と土塁を確認する。また同氏宅の西側畠から遺物を採集する。

10月25日 中伊佐沢地区 西山、蜂屋敷、矢島、胡桃ヶ入、沖野でそれぞれ遺物を採集する。愛宕山で堀切り・廊を、桐町の館で土塁・堀をそれぞれ確認する。

10月28日 上伊佐沢地区 若戸で堀切り・帯廊を、堤ヶ入で堀切りを確認する。また、片川前、蜂屋敷、寺山で遺物を採集する。

10月29日 上伊佐沢地区 善並、岩穴、岩穴小路で遺物を採集する。

10月31日 大石地区 中屋敷で帯廊・堀切りを舟付場茶屋跡で廓を確認する。

11月2日 日の出町地区 外川前、油沢裏を確認する。

11月4日 金井神地区 天狗沢、沢尻で遺物を採集し、金井神を確認する。

表-1 分布調査行程表

	10月	11月	12月	1月	2月	3月
聞き取り調査	■					
現地踏査	■	■				
繩張図作成		■	■	■		
資料整理 報告書作成			■			

II 伊佐沢地区遺跡の概要

長井市の南東部に位置する伊佐沢地区は、出羽丘陵の南端部にあたり、東側は南陽市と接している。南が開けた平坦地は南北に広がり、大石沼に源を発する逆川は平地の中央部を南に向って流れ、下伊佐沢地区で最上川と合流する。遺跡は逆川によって形成された河岸段丘を中心に山腹から山の頂まで数多く散在している。

また、出羽丘陵の西辺は、最上川の浸食で形成された河岸段丘で、面積は限られているものの遺物の散在が見られる。

昭和53年度版の山形県遺跡地図には、伊佐沢地区で岩穴遺跡・壇の越遺跡・元八幡遺跡・太田遺跡・上の台遺跡・蜂屋敷遺跡の計6遺跡が登載されているが、その後の開発件数の増加や地元地区民の埋蔵文化財への関心の高まりなどから、新しい遺跡の発見があいついでおり、この度の調査結果にも現われている。

遺跡の立地から見ると、大きく3種類に分けることができる。第1の立地は、逆川とその支流によって形成された河岸段丘上に遺跡が多く見られることである。このことは、逆川の上流と下流域に顕著に見られ、この度確認された遺跡の半数以上を占める。採集された遺物は縄文時代の土器や石器が多く、次いで、平安時代の須恵器や中世・近世の陶器とづく。第2の立地は山頂付近に見られるもので、山の頂や尾根沿いに遺構が築かれるものである。この場合遺物の散在はまったく認められず、山頂付近を平坦にならしたり、「U」字型の溝や土塁を築くなど、大規模な土木工事の跡がうかがわれる。それらはいずれも見晴らしが良く、主要道路や近隣のまちまで見わたすことができ、まさに中世の館跡にふさわしい場所とつくりである。第3の立地は、山麓沿いに見られる遺跡である。山地と平地の境目付近に須恵器や陶器が散在する。

次に遺物の採集状況から推測されることを述べてみる。この度の現地踏査で採集できた遺物の量は、遺跡によって差が見られた。逆川上流の大石地区では、多量の遺物が採集されたが、遺跡が密集する下流域での遺物の散在は極端に少ないものである。しかし、同じ下流域でも、遺跡の中心部が土木工事等にかかった場合には遺物の量も多く、しかも保存状態が良いものが多い。以上のことから、逆川上流では表土層が薄く、遺物包含層までが比較的浅いのに対して、下流域では表土層が厚く堆積し、遺物包含層が深いということができる。このことは、根菜類の畠の耕作や収穫時に遺物の出土が見られることや、切通しから見る土層堆積からもうかがうことができる。また表面採集した遺物からだけの判断であるが、逆川を境にして東側に縄文時代の遺跡が多く、山の浅い西側には比較的時代の新しい遺跡が多く見うけられる。



第1図 分布調査遺跡位置図

III 調査の概要

遺跡番号	種別	遺跡名	所 在 地	時 期	地 目	立 地
I-31	散布地	菅 沢	昭和62年度調査実施			
I-32	散布地	水 上	昭和62年度調査実施			
I-33	散布地	稻 荷 前	昭和62年度調査実施			
I-34	散布地	天 神 平	昭和62年度調査実施			
I-35	散布地	竹 の 俣	長井市下伊佐沢字竹の俣	奈良・平安	宅 烟 地 地	段 丘
I-36	散布地	中 屋 敷	長井市下伊佐沢字中屋敷	繩文時代	烟 宅 地 地	段 丘
I-37	館 跡 散布地	館 ノ 内	長井市下伊佐沢館ノ内	繩文時代 平安時代 中 世	宅 烟 地 地	段 丘
I-38	散布地	胡桃ヶ入	長井市中伊佐沢字胡桃ヶ入	繩文時代 平安時代	烟 地	山 薦
I-39	散布地	矢 島	長井市中伊佐沢字矢島	平安時代	烟 地	山 薦
I-40	館 跡	愛 宕 山	長井市中伊佐沢	中 世	雜 木 林	山 項

遺跡概要	遺物	備考
本遺跡は区画整理がなされたほ場のなかに、微高地状に残っている。宅地の周囲は畠になっており遺物は南側の畠から採集した。	土師器片	新規
逆川にそそぐ小河川の左岸上に位置する遺跡で、ぶどうの苗を育成する畠に、遺物が散布する。	石皿片	新規
No.36の対岸に位置する。館ノ内という字名のとおり屋敷の東と北側に堀と土塁が残存している。また、西側の畠より遺物を採集する。	土器片・剥片・須恵器・陶器	新規
中伊沢沢南地区の舟橋から西に約250mの山麓に位置し、東斜面60×90メートルの範囲に遺物の散布が見られる。	剥片・須恵器片	新規
No.38の北側約50メートル離れた山麓東斜面に遺物が散布する。	須恵器片	新規
神社が祭られている山頂は壇状に築かれている。ここから東・南・北にのびる尾根には、約500メートルの範囲にわたり溝や平場がみられる。		新規

調査の概要

遺跡番号	種別	遺跡名	所 在 地	時 期	地 目	立 地
I-41	散布地	沖 野	長井市中伊佐沢字沖野	縄文時代	烟 地 墓 地	段 丘
I-42	館 跡	桐町の館	長井市中伊佐沢字桐町	中 世	烟 地 宅 杉	段 丘
I-43	散布地	蜂屋敷B	長井市上伊佐沢字蜂屋敷	縄文時代 平安時代	烟 地	段 丘
I-44	散布地	西 山	長井市中伊佐沢字西山	平安時代 江戸時代	烟 地	山 蔗
I-45	散布地	寺 山	長井市中伊佐沢字寺山	中 世	烟 地	山 蔗
I-46	館 跡	若 尻	長井市上伊佐沢字若尻	中 世	雜 木 林	山 頂
I-47	館 跡	堤 ケ 入	長井市上伊佐沢字堤ヶ入	中 世	雜 木 林	山 頂
I-48	散布地	岩穴小路	長井市上伊佐沢字岩穴小路	近 世	烟 地	山 蔗
I-49	散布地	片 川 前	長井市上伊佐沢字片川前	縄文時代 近 世	烟 地	山 蔗
I-50	散布地	岩 穴 B	長井市中伊佐沢字岩穴	縄文時代	烟 地	山 蔗

遺跡概要	遺物	備考
逆川右岸の段丘上に位置する。墓地の東側は逆川に向かってゆるやかに傾斜する畠地になっており遺物が散布する。	剝片	新規
三方を大小河川に囲まれた段丘上に位置し、北側には土塁と堀が、また南側にも一部土塁が残っている。館主は山田主殿と伝えられている。		新規
逆川によって形成された段丘上に位置する。蜂屋敷遺跡の東南にあり、段丘の東西端の畠地に遺物の散布が見られる。	縄文土器片・剝片・須恵器片・陶器片	新規
愛宕山から北東に張り出した尾根のふもとに位置する。東側は土地改良が行なわれているが、山側はたばこ畠となっており遺物が散布する。	須恵器片・陶磁器片	新規
No.44の北約200mの山麓上の畠地に、遺物が若干散布する。	陶器片	新規
山頂は2~3重の帯廓が巡り、また尾根には200mの範囲にわたり、帯廓や堀切りが設けられている。東斜面は土採のため破壊されている。		新規
No.46の北西約100mの山頂に位置し、堀切りや廓が見られることから、若尻との関連が考えられる。		新規
上地区から岩穴に通じる道路沿いは、山麓から張り出した台地になっている。道路の西側の畠に遺物が散布する。	陶磁器片	新規
遺物はは丘陵と道路にはさまれた、南北に長い畠に散布するが、道路をはさんだ西側の田にも遺跡の範囲が広がるものと考えられる。	剝片・陶磁器片	新規
山麓は東に向かって壇状に張りだし、ゆるやかに傾斜している。斜面一帯はたばこ畠になっており一番高台にある畠に遺物が散布する。	剝片	新規

調査の概要

遺跡番号	種別	遺跡名	所 在 地	時 期	地 目	立 地
I-51	館 跡	中屋敷裏	長井市上伊佐沢字中屋敷裏	中 世	雜木林	山 頂
I-52	館 跡	舟付場茶 屋跡	長井市上伊佐沢字舟付場茶 屋跡	中 世	雜木林	山 頂
I-53	館 跡	小 開 館	長井市下伊佐沢	中 世	宅 地	段 丘
CH-1	包蔵地	日の出町	長井市日の出町	不 明	宅 地 畑 地	段 丘
CH-2	包蔵地	外 川 前	長井市日の出町字外川前	不 明	畑 地	段 丘
CH-3	包蔵地	油 沢 裏	長井市日の出町字油沢裏	平安時代	工 場 水 田	段 丘
CH-4	包蔵地	天 狗 沢	長井市金井神字天狗沢	繩文時代	休 耕 田	山 脳
CH-5	包蔵地	沢 尻	長井市金井神字沢尻	繩文時代 平安時代 中・近世	杉 林	山 脳
CH-6	包蔵地	金 井 神	長井市金井神	繩文時代 弥生時代	宅 地 畑 地	段 丘
CH-7	包蔵地	横 町	長井市横町	平安時代	宅 地 道 路	沖積平野

遺跡概要	遺物	備考
廻館の北隣りの山頂に位置する。山腹には2～3重の帯廊が廻り、北にのびる尾根に沿って幅1～2mの溝状の道が數十メートルにわたり見られる。		新規
一帯は通称「舟付場茶屋跡」と呼ばれている。山頂付近は平坦になっており、北側に張り出す尾根には三段にわたり平場が築かれている。		新規
小関氏宅には巾三間の館濠が現在も残っている。また、館の見取図も手伝っており、貴重な資料ということができる。		新規
昭和30年代にふどう畑を開墾した際、一個体の土器が出土したと言う。現在は宅地や畠地となっており一部破壊されている可能性もある。		新規
戦後開墾した際、土中より川原石に包まれるようにして瓶が出土したと言う。現在は段丘南端の土採りにより遺跡は破壊されている。		新規
二重坂登口の北側の水田から、精密機器の工場造成の際、土器片が出土している。現在は工場の駐車場やグランドになっている。	須恵器片	新規
通称蛇食沢の天狗沢にある山腹の平坦地に位置する。昭和30年代に開田した際、土器や石器が出土している。	磨石	新規
戦後、原野を開墾した際、多数の土器片が出土している。緩斜面で比較的せまい範囲から、多量の須恵器の出土があるので窯跡の可能性もある。	縄文土器・土師器・須恵器・陶磁器	新規
天王川左岸は段丘を形成しており、下流には人家や畠が多い。竹田孫助氏宅で昭和40年代に家を改築した際、多数の土器・石器が出土した。	縄文土器片・弥生土器片・剝片	新規
遍照寺の南約50mの道路の交差点において、下水道工事が行なわれた際、地下約1mの地点から土器片・陶磁器片が出土した。	土師器片・須恵器片・陶磁器片	新規

山形県遺跡地図登載遺跡一覧表(昭和53年度版)

遺跡番号	種別	遺跡名	所在地	時期	地目	立地
1354	集落跡	宮	長井市十日町	縄文時代 (中期)	住宅地	平地 (200m)
1355	集落跡	岩六	長井市上伊佐沢字岩六	縄文時代 (前期・中期)	畑地	河岸段丘 (260m)
1356	集落跡	壇の越	長井市上伊佐沢字善並	縄文時代 (中期)	水田	河岸段丘 (250m)
1357	集落跡	元八幡	長井市上伊佐沢3313	古墳時代	畑地	段丘 (227m)
1358	集落跡	太田	長井市上伊佐沢1812	古墳時代	水田	河岸段丘 (220m)
1359	集落跡	上の台	長井市上伊佐沢 字上の台521の2	縄文時代	畑地	段丘 (230m)
1360	集落跡	峰屋敷	長井市上伊佐沢字上の台	縄文時代	畑地	段丘 (222m)

遺 路 概 要	遺 物	備 考
昭和31年に長井市教育委員会が発掘調査実施。昭和48年本遺跡の北西部からも遺物が確認され範囲が広がった。	縄文土器 (大木7a・7b・8a) 石匙・石箋・石皿・ 叩石	昭和53年度版遺跡 地図登載
河岸段丘上に位置し、東西50m・南北100m の範囲に遺物が散布する。遺存状態は良好である。	縄文土器片	△
昭和35~36年ごろ、開田の際一部破壊を受けている。	縄文土器片・搔器・ 石錐・石槍・磨製 石斧・剝片	△
段丘上の畠地に東西30m・南北50mにわたり遺物 が若干散布する。	土師器	△
河岸段丘上に位置する。昭和42~43年ごろ、開 田時に一部破壊されている。遺跡範囲は東西30 m・南北40m。	土師器	△
段丘の畠地一帯に遺物が散布する。	縄文土器片・磨製 石斧	△
伊佐沢小学校の北側に在る。散布地の東と西は 道路になっており、この道路にはさまれた畠地 を中心にして遺物の散布がみられる。遺跡範囲は東 西200m・南北300m。	石箋	△

IV 遺跡の位置と現況



第2図 遺跡位置図



No.35 竹の俣遺跡遠景



No.36 中屋敷遺跡遠景



No.37 館ノ内遺跡近景



No.37 館ノ内遺跡堀跡



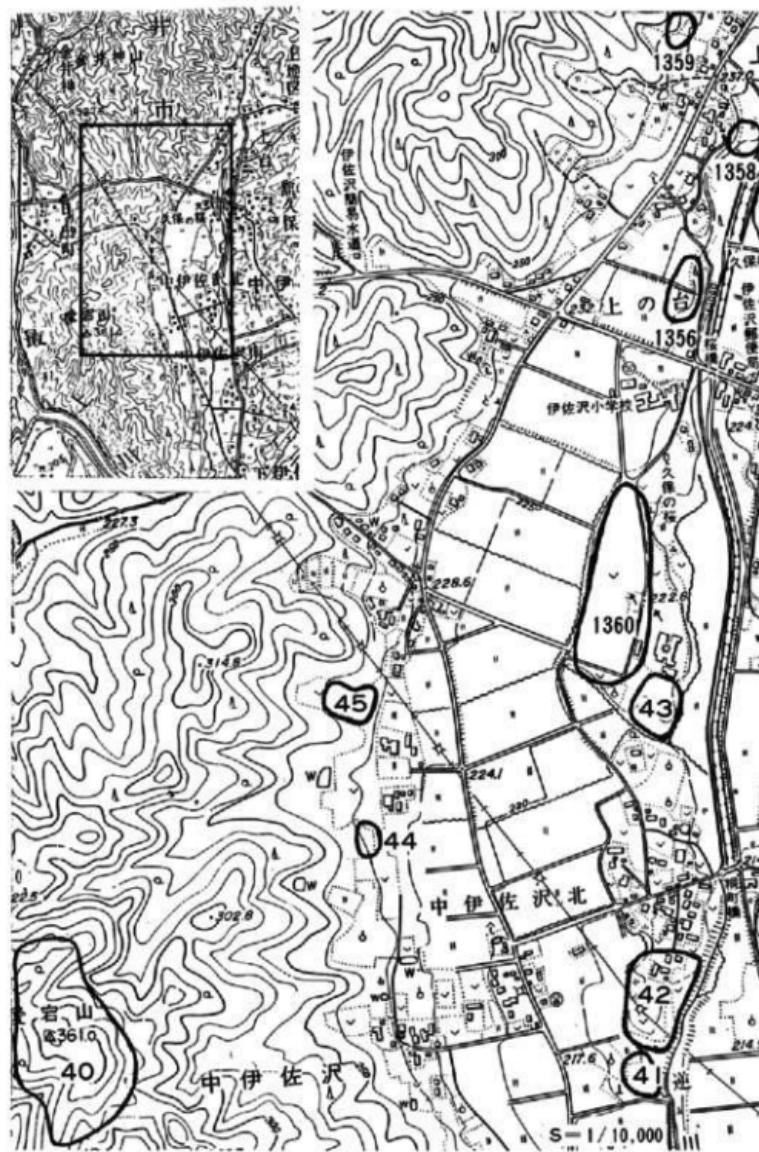
No.38 楠ヶ入遺跡遠景



No.39 矢島遺跡遠景

図版1 遺跡現況

遺跡の位置と現況



第3図 遺跡位置図



No.40 爰宕山遺跡近景



No.41 沖野遺跡近景



No.42 桐の館近景



No.43 蜂屋敷B遺跡近景



No.44 西山遺跡遠景



No.45 寺山遺跡遠景

遺跡の位置と現況



第4図 遺跡位置図



No46 若尻遺跡遺景



No48 岩穴小路遺跡近景



No49 片川前遺跡近景



No50 岩穴臼遺跡近景

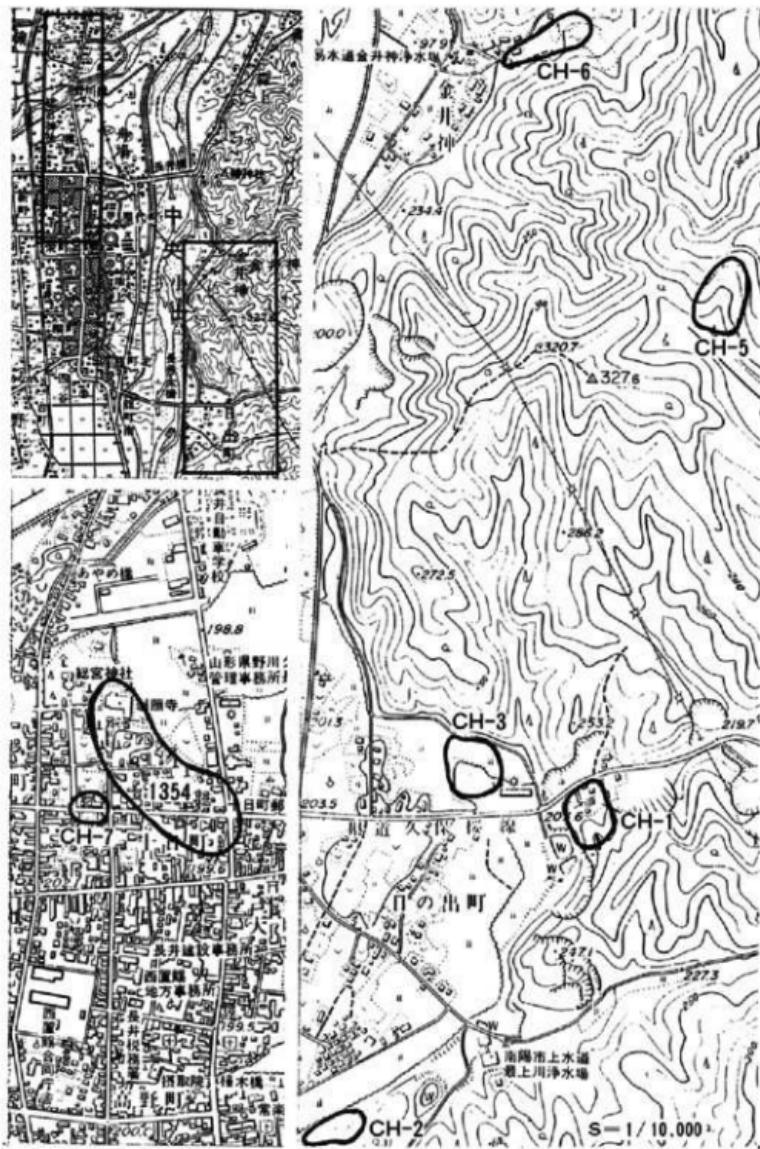


No52 舟付場茶屋跡近景



No OH-1 日の出町遺跡

遺跡の位置と現況



第5図 遺跡位置図

遺跡の位置と現況



No CH-2 外川前遺跡近景



No CH-3 油沢裏遺跡近景



No CH-4 天狗沢遺跡近景



No CH-5 沢尻遺跡遠景



No CH-6 金井神遺跡遠景



No CH-7 横町遺跡近景

図版4 遺跡現況

V 城館遺跡について

館跡は大きく分けて平坦地に構築された館と、山頂を中心に構築された館の2種類に大別することができる。両者は普通セットをなし通常の生活は前者、つまり平坦地の館で生活し、いざ戦になると山の館にこもり要塞とし戦いに臨んだという。ここでは今年度調査を実施した逆川の西側一帯の城館遺跡を中心に述べてみる。

No37 館ノ内の館（下伊佐沢）

逆川に向かって西に伸びる段丘上に位置する。横沢氏宅の東側は幅約4メートルの堀が巡らされ、ブロックによる改修が見られるが現在も水をたたえている。北側にも堀跡が見られるが埋まりかけている箇所もある。また、これらの堀に沿って土塁が築かれ高いところでは2メートルにもおよぶ。南側は段丘の急斜面を利用した自然の要塞となり、西側は段丘の先端を利用した段状のテラスを形成している。

No40 愛宕山（中伊佐沢）

山頂には神社が祭られ眺望がよく古くから人々に親しまれてきた。山頂からは尾根が四方に伸び、東側では規模の大きい廓が数段構築されている。神社の北には一辺が5~6メートルで高さ約2メートルの方形の壇が築かれているほか廓や堀切りがある。また、南に伸びる尾根には数10メートルにわたり堀切りや小規模な廓が構築されている。最上川は愛宕山の麓で白川と合流しながら進路を北に変えていることから、あたかも愛宕山を「く」字型に巡っているようである。

No42 洞町の館（中伊佐沢）

逆川右岸の段丘上に築かれた館で、北を除く三方を大小河川にかこまれた河岸段丘上に位置する。そのため北側には大規模な堀と土塁が築かれ、比高差は5メートルにもおよぶ。また、館の規模はほぼ100×80メートルの方形を呈し、北から南に向けて三段の高低差をもつ廓が構築されている。館主は山田主殿と伝えられている。

No46 若尻 No47 堤ヶ入（上伊佐沢）

通称「雨ヶ沢の館」の西に位置する山頂にある。若尻は東斜面が土採りのため破壊されているが、山頂を中心に西側の尾根には8~10箇所の堀切りや廓が構築されており、また北西にのびる尾根には3ヶ所の帯廓と、幅3メートル高さ4メートルの堀切りがみられる。この尾根の延長上に堤ヶ入があり、規模は小さいが数条の堀切りが構築されている。

No51 中屋敷裏（大石）

昨年の調査で発見された廻館の北隣の山地にある。西側の中腹には長さ10数メートル幅

2メートルの帯廊が、また南西にのびる尾根には4ヶ所の小廊が構築されている。さらに北西にのびる尾根沿には幅2メートルの道形が数百メートル続いている。

No52 舟付場茶屋跡（大石）

通称第二の七曲をとおり、大峰にねけるところに舟付場茶屋跡がある。尾根から張りだした小丘陵上には廊がみられ、北に張りだす丘陵には堀切りと廊が築かれている。

No53 小閣館（下伊佐沢）

龍雲寺の北に位置する。東・西・南を三間幅の館濠で囲まれ、北は小河川が形成した河岸段丘となっている。館の内約6反の面積を有する長方形の館である。小閣氏によると、永禄6年（1563）に小閣修理義勝のとき、美濃國から移って伊達の家臣となり、伊佐沢の村地頭になったという。また、となりの龍雲寺は寛文8月（1668）に小閣五郎右衛門が開基したものといわれている。さらに同氏宅には小閣館の見取図が伝えられており、現在の造構はもとより縁起や見取図を備えており大変貴重な館跡ということができる。

このように伊佐沢地区は多くの館跡が密集しており、また共通の特徴がみられる。まず山館の立地条件をみると、標高が350～400メートルの山の頂から尾根にかけて造構が築かれている。尾根を垂直に切り込んだ堀切りは随所にみられ、規模の大きいものでは高さ幅とも4メートルにおよぶ。また、緩斜面には廊とよばれるテラス状の平坦地が築かれている。さらに規模の大きな山館には山頂を中心に、帯廊とよばれる大規模な溝が二重～三重巡っている。これらは軍事上の施設と考えられている。

平地の館跡にもいくつかの共通点を見ることができる。当地区は逆川をはじめ河川の発達による河岸段丘の形成が随所にみられる。館跡はこの河岸段丘の縁辺部をうまく利用して構築している。すなわち、段丘の突端や縁辺部は急斜面を形成し落差を生み出す。この高低差を利用することにより自然要害とするのである。段丘の先端部に構築した例としては中伊佐沢にある桐町の館（第6図）をあげることができる。東・西・南面は段丘の崖を残し、地続きとなる北側には高低差5メートルにおよぶ土塁と堀を構築し備えを固めているのがうかがわれる。段丘の縁辺部に構築された例としては、館ノ内の館（下伊佐沢）、小閣館（下伊佐沢）があげられ、四方のうち一面が河岸段丘の斜面で、三方を堀で囲み他と一線を画している。

以上、山の館跡と平地に築かれた館跡について特徴的なことがらをあげたが、現在目にすることができるものは数百年経過した姿である。限られた範囲に館跡が密集していること、館跡の時期的な移り変わりなどを含め、文献資料に限りがある中世社会の究明に努めなければならない。

城館遺跡について

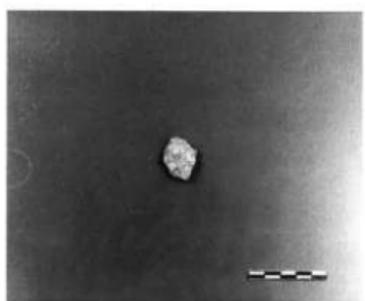




第6図 桐町の館縄張図

VI 遺 物

本年度の調査区で新たに発見した遺跡はNo35~60の26遺跡である。そこで採集した遺物を図版の順に次に説明をする。No35は土師器の破片で表はヘラ削り、裏は横ナデをしている。No36は磨石の一部であるが石材は硬質で固いものを摺ったと思われる痕跡がある。No37の上段左は縄文土器片、中は石器一撃器である。右端の須恵器は両面にタタキ目があり10世紀後半に位置づけたい。下段の左は青磁破片、右は摺鉢破片で江戸期（18世紀頃）と思われる。この館は逆川が松川に注ぐ近くに位置し水利権などの要地でそれらについての遺物も包含していると思われる。No38の上段左は石器の剝片、他の5点は須恵器（杯）の破片で10世紀ぐらいに位置づけたい。No39は須恵の杯底部で黒ずんだ色を呈している。10世紀後半のものと思われる。No41は石器の剝片、No43の上段左は縄文土器片、中は石器の剝片、右は須恵杯の口縁部破片、10世紀前半のものか。下段の中はかき釉の陶器、時期不明。その両側は須恵の破片で左の破片は板目のタタキ、右側の裏側にはカキ目がある。ともに10世紀後半と思われる。No44の左は甕の破片でかき釉、2次焼成をしている。19世紀後半（幕末頃）に位置づけたい。右は須恵の杯底部で切離しが荒い。内側にカキ目、10世紀後半に位置づけたい。No45の2点は中世陶器破片、左は器種も時期も不明、右側は浅鉢の破片でうわぐすりがかけられている。時期不明。No48の2点はすり鉢の破片で19世紀後半（幕末から明治初年）に位置づけたい。No49の左は石器の剝片で半透明で紅玉隨と思われる。右は摺り鉢の破片。No50の左は土師器破片、器種・時期とともに不明、右は不定形石器である。No1359の左は赤焼土器片、右は陶器破片で内側にうわぐすりがかけられている。江戸初期のものか。No1360は石器の剝片。NoCH-3の3点はともに須恵の破片、左は墨書き土器、中は甕の底部、右は甕の破片、10世紀代に位置づけたい。NoCH-4は断面三角石の磨石で全面が（継の部分も）すられている。時期は縄文早期から同前期にかけての遺物。NoCH-5は須恵の破片、器種は丸底の甕と思われる。径は約60センチ位か。9世紀前半に位置づけたい。同NoCH-5の6点のうち上段左と下段の右は縄文土器片で時期不明。他の4点は土師器片、上段中は口縁部片、右の破片は表にタテ、裏に横のハケ目がある。下段の左と中はともに内黒土師器、図版8のNoCH-5の6点のうち、下段の左と中は土師の杯で10世紀末から11世紀にかけてのもの、他の4点の破片は須恵杯の破片である。左上は10世紀後半、中と右端、下段右端の3点の年代は9世紀後半と思われる。同じくNoCH-5の3点の石は砥石で時期は不明。NoCH-6は竹田義一氏が金井神地内で採集した遺物である。上段左2点と下段左2点は縄文後期の土器片、上段右から2番目は弥生土器片、右端は土師器片、下段右2点は石器で右端は削器、中はクレーク。NoCH-7は土師の大鉢の破片（手持削り）で右は須恵の甕、ともに9世紀前半に位置づけされる。中は土瓶の底部破片で19世紀前半のものと思われる。



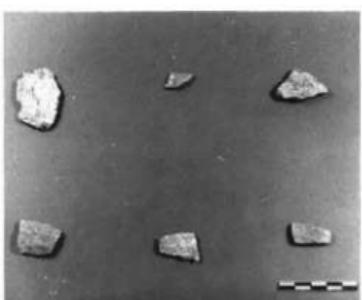
No.35 竹の灰遺跡



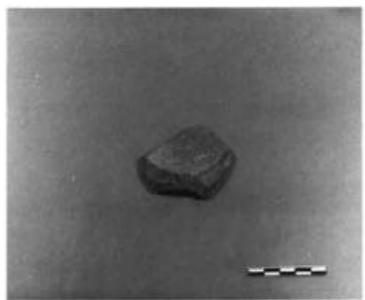
No.36 中屋敷遺跡



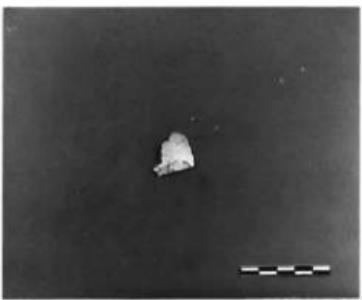
No.37 館の内遺跡



No.38 棚ケ入遺跡



No.39 矢島遺跡



No.41 沖野遺跡

図版5 分布調査遺物



No.43 蜂巣窯B遺跡



No.44 西山遺跡



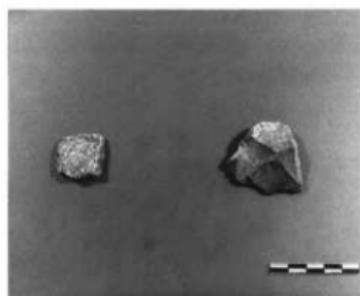
No.45 寺山遺跡



No.48 岩穴小路遺跡



No.49 片川前遺跡

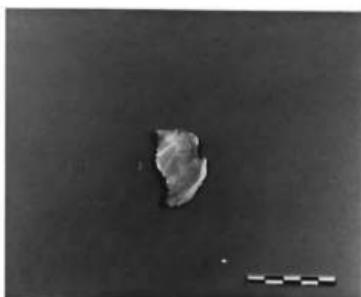


No.50 岩穴B遺跡

図版6 分布調査遺物



No1359 上の台遺跡



No1360 蜂屋敷遺跡



NoCH-2 油沢表遺跡



NoCH-4 天狗沢遺跡

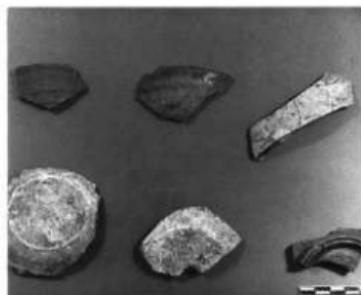


NoCH-5 沢尻遺跡



NoCH-5 沢尻遺跡

図版7 分布調査遺物



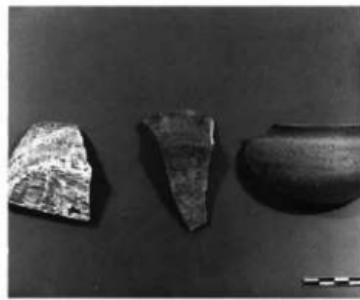
NoCH-5 沢尻遺跡



NoCH-5 沢尻遺跡



NoCH-6 金井神遺跡



NoCH-7 横町遺跡

図版8 分布調査造物

VII 勧進代地区土地改良事業に伴う分布調査

1 調査に至まで

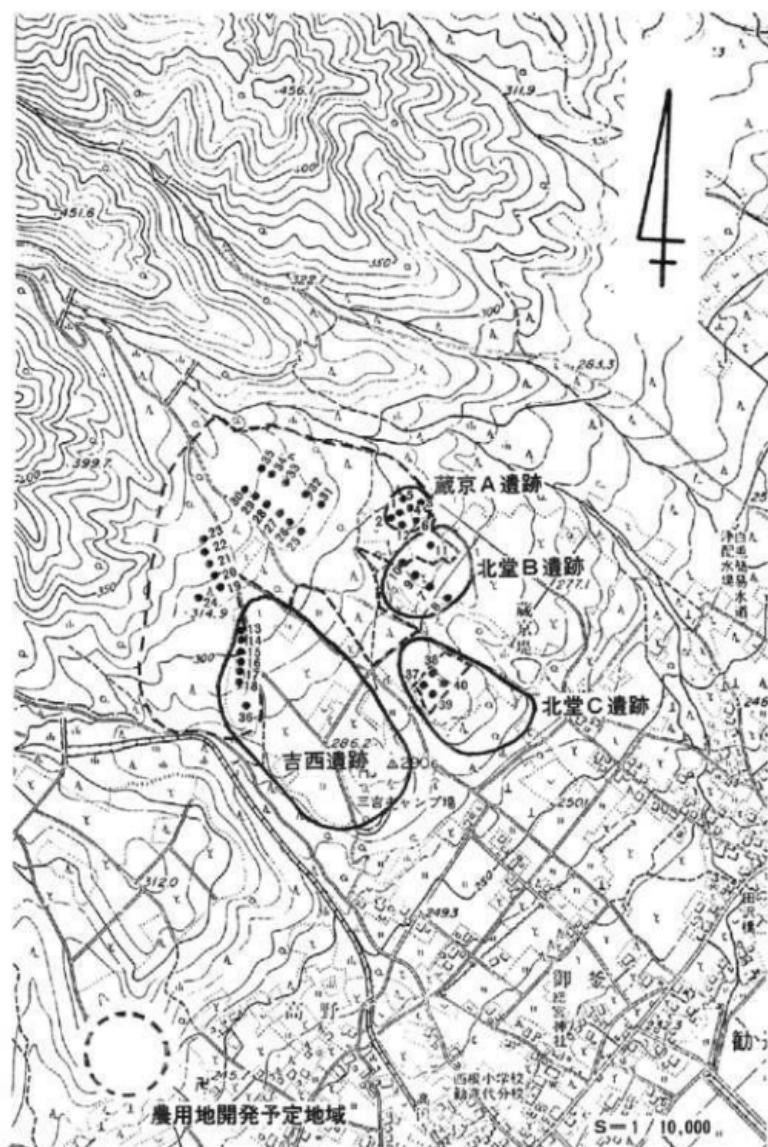
勧進代地区は昭和57年に分布調査が実施され、現在まで11箇所の遺跡を確認してきた。市教育委員会では埋蔵文化財保護の観点から、農林・土木事業を中心に各種事業計画について関係機関への照会を行なった。その回答を受けてこれまで分布調査を実施した結果を踏まえ関係機関と協議を行なった。それによると西山山ろくを南北に縱走するかたちで広域農道が造成されるのに伴い、勧進代地区では山林・原野を中心とした13ヘクタールを農用地として開発する計画である。開発予定地には藏京A遺跡・北堂B遺跡・北堂C遺跡・三吉西遺跡の4箇所が含まれているため、遺跡と開発事業の関わりを明らかにする目的で分布調査を実施した。

2 調査の方法

開発事業にかかる4遺跡のうち北堂C遺跡は、これまで試掘調査や発掘調査を実施してきたため遺跡の範囲・時期・性格等について明らかにされてきた。しかし他の3遺跡は山林であることから地表面上の調査に依るところが多かったため、この度の試掘調査を行なった。すなわち開発予定地に含まれる遺跡の範囲に、2メートル四方のテストピットを必要な数だけ掘り、遺物の出土状況・遺構の有無・土層の堆積状況をもとに遺跡の範囲や性格を明らかにするものである。

3 調査の経過

調査は昭和63年9月28日、10月7日～8日、10月19日にかけて実施した。北堂C遺跡は桑畠・畑地となっている。丘陵の微高地に試掘を入れたところ、石器や土器が多数出土した。さらに地表下約40センチメートルで遺構の一部を検出した。北堂B遺跡はほとんどが桑畠となっている。小丘陵の南斜面を中心に5箇所の試掘を実施したが出土遺物はなく遺構も検出されなかった。藏京A遺跡は山林となっているが以前旧石器時代の石核が採集されたところでもある。7箇所の試掘を行なったが遺物・遺構は検出されなかった。三吉西遺跡は現在桑畠・山林となっている。丘陵の尾根沿いに試掘を行なったところ、No.15のテストピットの地下約60センチメートルから剝片が出土した。しかし遺構が検出されず、他の試掘からも遺物・遺構が認められないで、開発にかかる箇所は遺跡の中心から外れていると考えられる。このほか遺跡の立地条件に該当する地域に試掘を入れたが、遺物・遺構は認められなかった。したがって、緊急調査を必要とする遺跡は北堂C遺跡が該当し、他は開発が行なわれる際は慎重事が該当する。



第7図 勘定代地区分布調査概要図



龍京A遺跡遠景



北日遺跡近景

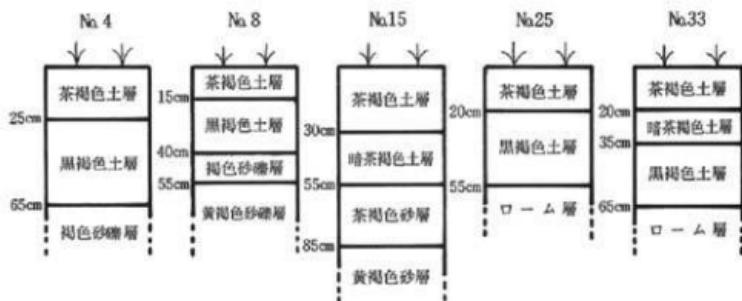


北堂C遺跡近景



三吉西遺跡近景

図版9 遺跡現況



第8図 試掘調査土層住状図

VIII まとめ

1 遺跡数とその分布及び遺跡概要

昨年度と今年度の伊佐沢地区の分布調査において新規に発見した遺跡数は59、内6遺跡は金井井地区内の遺跡であるが、便宜上同一地域内の遺跡としてまとめてみる。地区内には今まで既に登録されている6遺跡を加えると65遺跡の存在が確認されたことになる。

これを立地的にみると前にも述べたように、第1は逆川とその支流の河岸段丘上の遺跡と第2は山麓添いに立地した遺跡と、第3には山頂を中心に営まれた城館等の遺跡といえようである。その分布は逆川の下流の河岸段丘やその中小河川による沖積地には40遺跡が密集している程である。その沖積地には縄文遺跡が20余が数えられる。そして古代・中世の人びとの生活の跡をとどめるのは逆川からやや奥まった山添いに点在している。また平坦地にある中世の館跡の4遺跡は逆川のほとりや逆川の下流の最上川合流地点近くに設けられているなどは興味深いことである。

縄文遺跡の遺物が大石地区で多いのは、表土層が浅く遺物包含層にまで農機具の刃先が入っているためであろう。それに対し逆川の下流域では表土層も厚く遺物包含層も一般に深いようである。例えば、渡部要三氏の畠から収穫時に出土した縄文晩期の岩版は地表から60センチ近いところから出土している程である。この縄文遺跡数が逆川の東側一帯に多いのは、逆川河岸段丘とその支流の中小河川による沖積地が早くから形成され、縄文人にとって生活の適地となっていたからであろう。

遺跡の立地について既に述べた城館址と土師器・須恵器等の遺跡については項を改めて述べる。

2 城館遺跡について

伊佐沢地区には15の城館遺跡があるが、このうち前項で触れた平地に営まれた館跡は4ヶ所で、その他の11はいわゆる山城といわれるもので、山頂を中心に営まれた遺構である。高いところでは、一之又遺跡の如きは標高600メートルを超えるものもあるが、一般には350～400メートル位の山頂を中心に様々な遺構をつくり出している。多くの館跡の頂上部には廓と呼ばれる平坦地をもち、緩斜面にもこの廓をもったり、また帯廓とよばれる大きな溝跡が二重にも三重にも巡っているものもある。規模の大きいものに姫館、御林、愛宕山などがある。愛宕山には東・南・北に延びる尾根には約500メートルにわたって溝や平場がある。

平坦地の小閑館は東・西・南の三方が館濠で囲まれ、館の内約6反の面積を有する長方形の館跡で、その原形をそのままとどめているのに加えて縁起や見取図等も伝えられているなど貴重な館跡である。そのほか、館、館ノ内、桐町の館の三遺跡は河岸段丘の先端部や突端部が急斜面をつくる地形を巧に利用して館を営んでいる。例えば桐町の館の場合は東・西・南は段丘の崖とその下を流れる河川と北側は堀と土壁で比高が5メートルにも及

んでいる。以上伊佐沢地区の城館跡に述べたが、その数が多いこと、貴重な館跡が多いことは地区の誇りとすべきであろう。

3 山城と修験について

伊佐沢地区の城館遺跡は15を数えたが、少なくとも次の3遺跡は修験とのかかわりをもつと考えるのでそのことについて述べてみる。勿論考古学的に実証する資料等は皆無に等しいので民俗学的な考察(?)でこのことに迫りたい。遺跡は廻館(マッタテ)と御林(オハヤシ)と裏山(ウラヤマ)である。廻館の山を土地の人びとの中に「オサンサア」と呼んでいることを調査中に耳にした。その山は極めて急峻な上り下りで身にこたえるようなことがあるだけで城としての機能も疑った程度である。後になってオサンサーのオは御、サンは山、サーは様で御山様のことではないかと考えた。またオハヤシは御林であるだろう。そしてそこに営まれた掘り切りや帶廓などは修験の行場にふさわしい場所と思えてならないのである。そこの発掘調査に期待したいものがある。次に芦沢の裏山遺跡であるが、そこには空濠や溝によって区画された壇がありその一隅に小さな祠がある。その中に納められている棟札には種子の次に羽山大權現…とある。祠の向きが白兎薬山であることや、尾根に掘られた堀り切りはどのように考へても軍事用のものではなく結界とみるのが自然であると思われる。この裏山には深い薬山信仰がありそのうえに薬山修験とのかかわりがあったように思えてならないのである。以上3遺跡について述べたが、伊佐沢地区には法印が多くいたといわれるが、これまた修験との深いかかわりをもっていた伊佐沢地区であったことを物語るものであろう。

4 遺物について

○土師・須恵の散布する遺跡 縄文のことについては前に若干ふれたのでここでは土師・須恵等を中心述べるが地区内で採集した遺物の殆どが須恵器片でその中には土師器・内黒の土師器片がある程度である。採集した遺跡は、穂長入・向山・安城沢・天神平・館ノ内胡桃ケ入・矢島・蜂屋敷B・西山・油沢裏・沢尻等で、そのうち須恵の窯跡と知られているのは穂長入である。また天神平等愛宕山山麓に広い散布地があるが平地と山麓の接するあたりにはかつて須恵の窯が造られたのではないかと思われる。須恵には8世紀後半(奈良後半)のものから11世紀後半(平安の後期)のものまでそしてその後に使われた中世陶器の破片なども採集することができた。

○旧石器(旧石器時代の石器) 芦沢の荷渡原の洪積台地上(標高250)で削平されたローム層での旧石器(台形状の搔器)の採集は予想だにしない収穫で今後の調査に期待したい。

5 その他

伊佐沢地区の縄文時代最も栄えたと考えられるむら、そして中心のむら壇の越が何らの調査なしにこわれたのは後の世のためにも惜しまれる。今となってはどうにもならない。最後に大昔の頃、須刈田との「行き来」の道を探し求め歩いて今年の調査を終える。

長井市埋蔵文化財調査報告書第5集
伊佐沢地区
遺跡詳細分布調査報告書

平成元年3月13日 印刷

平成元年3月31日 発行

発行 長井市教育委員会

山形県長井市まほの丘5番1号

TEL 0238(64)2311

印刷 印刷の芳文社
